

北海道ニセコ地域における外国人居住者の生活実態と 広域まちづくり計画

代表 野村 理恵 （北海道大学大学院工学研究院建築都市部門 准教授）

[研究報告要旨]

本研究では、「ニセコ地域」と呼ばれるエリアに位置するニセコ町・倶知安町における外国人居住者の日常生活の実態を把握した上で、地元住民との関係や自治体の取り組みなどを検証し、外国人居住者及び地元住民の長期的な地域居住を目指した広域まちづくりに資する要点を検討することを目的とした。

まずは、主に季節的な短期滞在者に対して、居住や就業状況、地元住民との関係、よく立ち寄る場所といった基本情報に関するアンケート調査を実施した。居住環境としては、雇用先が提供する住居での共同生活が主流であり、立ち寄る場所や人間関係はリゾートエリアの飲食店等、限定的な範囲に留まることが明らかとなった。一方、既に定住している、もしくは定住意向のある回答者は、地元住民との友人関係があるなど、比較的積極的な交流が図られている。

次に、長期滞在をしている居住者がニセコ地域に対して抱いている認識についてインタビュー調査の分析を行った。ニセコ地域への定住経緯は、冬のスキーリゾートを何度か訪問する過程で移住を決めたという「リゾート経験タイプ」と、リゾートとしての訪問を経験せずに仕事関係の目的で住み始めるという「就業先獲得タイプ」に分類できる。さらに、インターナショナルスクールの開校によって子どもの教育環境を意識した移住もみられる。英語のみで生活できることは、外国人にとって生活利便性の向上に寄与している一方、特にリゾートエリアは「外国のよう」と表現され、異質なまとまりが形成されつつあることを懸念する声がみられる。日本語教室への需要が高く、自治体での取り組みもみられる。国籍が多様であることから、出身国やエスニックグループによらない関係性が構築されており、これはニセコ地域が選ばれる一つのきっかけとなっている。しかし、特に 2015 年頃からの開発によってそれらの魅力が失われているとの認識がみられる。今後の施策展開へ向けた要点として、自治体の担当職員とともに、外国人スタッフの役割、教育環境の整備、日常的な地域づくりにおける位置づけなどの重要性を共有した。